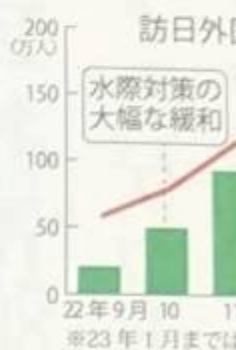


訪日外



た」（松屋）こと、ラグジュアリーブランドのハンドバッグ、宝飾品だけでなく、包丁など日本製の商品の売れ行きが良い。松屋は23年度下期に19年度実績並みまでの回復を見込んでい

4月には山下公園の再生プロジェクトを完成。飲食機能を備えたのは横浜市で初めて

公園再生事業室長兼営業本部副本部長）考えで、公園のレストハウスを改装した。カフェでは日中はファンゲルの体に優しい食材を使った朝食や昼食を、夜は地ビールや地産の魚料理が

た、「他にないデザインのアパレルとアートを融合した空間を売っている」（朝賀正孝）コンバインドジャパンセネラルマネージャー）のが特徴。ソウルのほか北京や上海、ニューヨ

革靴の産地の一つ、大阪市西区を拠点にするインキューベション施設の西成製靴塾。昨年月、大阪府立西成高校に靴作部を発足させるなど、地域社会への貢献や靴作りに携わる人への活動を進めている。今

設は94年で、地場産業を継承し手縫いの製法を教え、約3年前に運営方針を、創業支援と地域の活性化主として模索するなかで昨月、エスベランサ靴学院の

府立高に靴作り部

大阪・西成製靴塾が人材育成で支援



大山塾長（左）と靴作り部の竹田智輝さん。「部員になる前は革靴のことはよく知らなかったが自分の好みに合ったものを作れることがとても楽しい」と話す

て靴作り部を立ち上げた。

てもらいたい。若い人たちに「靴作りって面白い」と興味を持ってもらうために、「と、縁あって身に着ける学校づくり」に取り組むところだった。オリエンテーションや製靴塾でのワーク

西成高は府が指定する「多様な教育実践校」の1校。23年度から「地域との連携や社会で自立する力

産地に貢献、協力企業も増える

ショップを重ね、2年生3人の部員でスタート。大山塾長の指導の下で、毎週金曜日に活動し、今年3月には1人がブーツを、もう1人がローファーを完成させて作品展で発表した。同校で靴作り部を担当する肥下彰男教諭は「高校生でもたった半年でできるんだと驚いた。部員の1人は、西成に職人がいることを誇りに思うと話してくれ、とてもうれしかった。地場産業に携わる人の存在は、西成高の大きな強みになっていきそう」と話す。今年度は工芸の授業時間を生かし、一般の生徒にも靴作りを体験してもらおう計画という。

こうした地域社会を支援する動きに共感し、協力する企業も増えてきた。靴修理の靴商店インターナショナルは、天王寺区

の本社に併設していた工場を移転し、4月1日から建物の半分を共有して修理業務を行っている。「業務用の本格的な機材が揃ったので物作りの幅が広がる。作品制作だけでなく、現場の物作りと職人に接することができるのは、刺激を受ける機会になるはず」と大山塾長。靴作り部は生徒の自主性を尊重しており、「本人に意欲があればインターナショナルやアルバイトも可能だし、靴作りで食べていきたいとなれば、エスベランサ靴学院で学ぶ道も紹介できる」。

西成製靴塾では、新たな事業として、靴作りに携わる人材と靴を作りたい企業やブランドをつなぐマッチングサイトを始動する予定。「様々な人や企業が集まり、化学反応が起きる場にしていきたい」（須田渉美）